

E-6 家事科および家庭科に取扱われてきた家庭教育

昭和女大家政 原田富士子

1. 本研究は社会教育の場において、最近その重要性が説かれてきた家庭教育が家事科および家庭科の分野においてどのように取上げられてきたかをみようとしたものである。

2. 本資料は明治・大正・昭和の戦前戦後に出版された、家事科並びに家庭科の教科書中にこれを求め、数量的にまた質的分析を試みた。

3. その成果：明治から大正にかけての教科書には「家庭の教育」の項がかかげられているが、現行のものでは家庭教育の語が省かれ、生活指導その他になっている。前者においては諸徳—従順・誠実、慈愛・克己・勇氣—を涵養することをあげ、その躰方として命令・禁止・訓戒・賞罰を必要とするとし、また玩具・絵画・言語等による智育を強調している。以上に4~20頁をとっている。明治の末頃には小児の性質一般を取り上げたものもみられる。後者すなわち戦後のものには「家庭一般」で生活指導として約10頁、「保育」には生活指導・生活習慣・精神衛生等に30~40頁が使われている。前者は諸

徳の涵養を強く打ち出ししているが、後者は適応の教育と
みることができると思う。